



2014年12月15日発行 第 **549** 号

CONTENTS

読後雑感：2014年 第20回 2
上海街角インタビュー 59 12
【中国経済最新統計】 15



読後雑感：2014年 第20回

12. DEC. 14

アジア・アパレルものづくりネットワーク代表理事
株式会社小島衣料オーナー
東アジアセンター外部研究員
小島正憲

1. 「インドー2」
2. 「アジア・ルポルターージュ紀行」
3. 「人間の死に方」
4. 「死ぬってどういうことですか？」
5. 「どうせ死ぬのになぜ生きるのか」

1. 「インドー2 政権交代で億人の巨大中間層が生まれる」 帝羽ニルマラ純子著 日刊工業新聞社
2014年6月30日
副題：「日本人が理解できない混沌(カオス)の国 謎を解き明かす50問！」

著者は、「インドは2050年には中国を抜いて世界最大の経済大国になると予測されている」、「インドは世界最大の民主国家であり、昨今は国際的な舞台で大きな役割を担うようになってきている」と書き、インドの将来に大きな期待を持たせている。しかし同時に、そこに至るまでの過程で、インドが解決せねばならない問題点を、詳細に書き込んでいる。したがって本書を読めば、現在インドが抱えている問題がよくわかる。しかも一問一答形式になっており、読みやすい。

インドに進出する予定のある企業経営者には、一読をお勧めする。私が危惧する労働問題なども詳しく書かれている。

ただし、カースト問題、ヒンドゥー至上主義などについては言及されていない。以下に参考箇所を列記しておく。

- ・ インドには、貧困率、一人当たりの消費動向、学歴別の生産性、衛生状況、女性の識字率、都市化、家庭環境、銀行利用度などの正式な記録はない。これらのデータは全て州によってかなり違ってくるため、一つの統一した指標でインドの経済や生活水準などを測ることは不可能であり、透明性のある明確な指標とはなり得ない。
- ・ インドは国際的指標全てについて良くならなければいけないのだろうか。平和を愛し、シンプルに考える文化を持ち続ける限り、インド人は地

球上で最も幸せな人々ではないか。

- ・ インドではおよそ 200 以上の言語と 1600 以上の方言が話されている。
- ・ 非公式経済はインドに限ったものではなく、先進国にも確実に存在する。しかし、インドの場合、その規模は表の経済に匹敵する。つまり、インドの GDP 成長率が 5% であっても、5% の非公式経済の成長率が加わって実際には 10% であることもあり得る。この非公式経済は GDP やその他の経済指標からは見えてこない。
- ・ インドでは、非公式経済は「無申告収入」として知られる。こうした収入は個人事業主が合法事業として申告しない仕事から得た賃金、給与、資産から成っている。
- ・ インド労働者の 90% 以上が非組織部門に属している。例えば、農林部門の 99.9% の労働者が非組織部門である。インド経済の屋台骨を支えるのは非公式経済を支える非組織労働者であると言っても過言ではない。
- ・ 低賃金と経費削減目的で非組織労働者を雇用しても、ストライキが起きれば、企業は大きな損害を受ける。日本企業は雇用に関するリスクを再評価したほうがよい。
- ・ 人々が抱える最大の不安要因は、さまざまな労働組合が組織するストライキや、政党が主導するデモである。インドには約 11 の労働組合があり、これらが組織化部門と非組織部門のあらゆる分野の労働者を束ねている。個々の労働組合の背後にはバックアップ政党が存在し、ストライキを扇動する。インドにおける雇用を規定するのはインド労働法だが、労働に関しては 44 の連邦法とさらに多くの州法がある。これらの労働法は、例えば企業が労働力を削減したい場合になかなかできないなど、融通が効かない。**インドが低賃金の製造拠点となり、膨大な雇用創出を狙うならば、こうした労働法の全面見直しが必要だ。**
- ・ インドでは今日、土地売買や土地所有権に関する複雑な問題がある。多くの外資系企業のプロジェクトがどうしても遅れがちになるのは、土地取得と環境許可という点で深刻な問題に直面するからだ。今なお、外国人はインドで農地を買うことができない。
- ・ インド人は遺伝的に腹回りが太りやすい。原因は母親の太りすぎにあり、それが新生児に影響しているといわれている。インドの都会の子供のおよそ 2% が肥満で、8—10% は太りすぎである。そして子供の肥満は増加傾向にある。インドの莫大な人口を考えれば、肥満の増加は国家にとっては深刻な健康問題であり、医療費の増大を招くことになる。現に肥満の直接の

結果である糖尿病の人口は、2030年までに8100万人に跳ね上がると予測されている。過食とならび、インドで肥満が多い最大の理由が、動いてカロリーを消費しようとしないうことである。

- ・ インドでは1970年代以来、多数のビルマ人難民を受け入れている。ビルマのチン族はビルマ軍による拷問や辱めなど、人権蹂躪から逃れてインドに難民として移住してきた。
- ・ 西ベンガル州にはとりわけバングラデシュの国境沿いから不法移民が押し寄せている。西ベンガル州のコルカタとトリプラ州のアガルタラは、反政府組織の拠点になっている。・インド政府はバングラデシュとの2国関係を強化しようとしている。それによって、不法移民問題を緩和する助けになると考えている。
- ・ インドはミャンマーを中国に牛耳られたくないため、ミャンマーとの関係を強化したいと考えている。
- ・ インドは、国内に北東部および東部のナクサライトやムスリム過激派のムジャヒディンをはじめとするテロ組織など数多くの安全保障上の問題を抱えている。

2. 「アジア・ルポルタージュ紀行」 石田永一郎著 柘植書房新社 2014年12月10日

副題：「平壤からバクダットまで」

帯の言葉：「アジアの裏町から島々までをさまよい、泥の海を歩き、戦火を駆け抜けた渾身のルポルタージュ 時空を超えた幻想の旅路として描く 新機軸のアジア紀行」

この本は「東南アジア屋」と自負する著者が、記者として駆け巡ったアジアの、現地ルポ集である。副題は、「平壤からバクダットまで」であるが、実際にはフィリピンとインドネシアの記述が多い。それは石田氏の、「私自身は、あの戦争を“自存自衛のために致し方なかった”とする歴史認識には与しない。アジアへの侵略とその犠牲者数について仮に言及せずとも、あの戦争は日本の将兵と民間人合わせて300万人以上の命を奪い、主要都市を焦土とし、貴重な文化遺産の多くを焼失させた。この破滅的な結果を提示するだけで十分である。この結果と日本が引き替えにできる“戦争の価値”などありえなかったと確信している。戦争の結果、日本の軍国主義が敗北し、戦後には民主主義が育ったことは事実だが、かつての日本は、それを求めて戦争を始めたわけではない。民族破滅の寸前で戦争が終わり、たまたまもたらされた幸運な結果にすぎない。そう思う一方で、戦争の細部を学ばずして語られる教条的な歴史認識には、左

派、右派を問わず違和感を覚える」という信条によるものだろう。

平壤については、よど号事件の赤軍派メンバーとの面談（1990年時点）が書き込まれている。「若林がいちばん饒舌」、「小西と赤木は比較的寡黙」、「田宮だけは風格が違った」、「田宮が現れたとき、若林があわてて席を譲ろうと立ち上がった」などという個所を読んで、若林と面識のある私は、あの北朝鮮の地でも、こせこせした彼の性格が変わっていないことが面白かった。なお石田氏は、「記者としてもう一度訪れたい国を一つ選べと言われれば、ちゅうちょなく私は北朝鮮を挙げる。何が変わらず、何が変わったかをつぶさに見てみたい」と書いている。

フィリピンでは、貧しい人々が「葬式代」を捻出するために、「葬式とばく」を開帳するという。それを目当てに弔問客がたくさん集まり、長時間にわたり遺体の側で騒ぐため、遺族の悲しみを紛らわせる効果も大きいという。おもしろい風習である。また「現在は南沙諸島海域にある100以上の島、礁、暗沙などのうち約50を6か国・地域が入り乱れて実効支配する。支配地域の内訳はベトナムが20以上、フィリピンが9、中国が7以上、マレーシアが5以上。ブルネイも一部の領有権を主張、台湾は南沙諸島最大の島・太平島を支配している」と書いている。

元米兵たちと元特攻隊員たちの回想で、「カミカゼは本当に怖かった」と元米兵に語らせ、「カミカゼと自爆テロはどこが違うのか」という問いかけをさせている。それに対し元特攻隊員たちは、「特攻は戦時に戦闘員だけを攻撃した。平時に民間人を巻き込む自爆テロとは違う」と答えたと書いている。そして石田氏は、「ただ、現代の自爆テロにおいても、軍事侵攻や占領を受けた側の国民が、軍兵士や軍事施設だけを狙い、軍関係者だけを殺害する例は多々ある。こういった自爆とカミカゼとの差はどこにあるか。おそらく自爆死した者が、正規の戦闘員であったか否かぐらいではないかと思われる。実際、チェチェン、パレスチナ、イラク、アフガニスタンなどで、そういう自爆は数多く起きている。カミカゼを民間人を巻き込んだ自爆テロと同一視すべきでないとするならば、そういう自爆もテロと呼ぶべきではないのか」と書いている。

石田氏は、「フィリピンでは、対日協力者一般に人々が向ける目は今も厳しい。“日本は結局、素朴な民族主義者たちの情熱を利用しただけだった”」、「“大東亜共栄圏”という幻想の下、日本は結局、アジアの民族主義者の情熱を裏切った。それは日本が心に刻むべき“もう一つの戦争犯罪”だったのではないか」とも書いているが、この指摘は正しい。

タイのエイズ救済寺院については、「寺院の高僧が死への不安を訴える患者

に、“今までの人生で一番幸せだったところを思い出さない。だれもが死を向かえるのです。恐れてはいけない”となんども言い、励ます。苦しみの中で幸せだった日々を思う。それは患者にとってつらいことのように思えた。だが師は“幸せな思いでこそが、患者に死を受け入れさせる”と言う」と記述している。

ミャンマーについては、「アラカン山脈は、ミャンマーとインドとの国境付近に横たわる山脈で、これはマレー系とインドシナ系以上に文化、習俗が劇的に変わる境目で、ここを超えると人々の個人主義的度合いは一気に強まる」と書いている。バングラデシュについては、ムハマド・ユヌスのグラミン銀行のことを記述しているが、踏み込みは浅い。

3. 「人間の死に方」 久坂部羊著 幻冬舎新書 2014年9月30日

副題:「医者だった父の、多くを望まない最期」

帯の言葉:「どうか父の死を笑ってください、あきれてください」

本書の題名は、「人間の死に方」であるが、実際の本文の内容は、「私の父の死に方」であり、人間一般の死に通用するような哲学的かつ思想的なものは書かれていない。まさに久坂部氏の「実父の死」に関しての個人的な体験記である。それでも私は、本書からきわめて多くのことを学ぶことができた。なぜなら本書には、長年、高齢者医療に携わってきた久坂部氏と、また麻酔医としての実父の、つまり医療の現場に精通している二人の「死に方」に対する態度や思考が詳細に描き込まれているからである。それは当節の医学常識を超越したものとなっており、きわめて含蓄のあるものとなっている。実父は重い糖尿病患者でかつ痴呆症も患いながら、87歳まで生き延びた。その実父を久坂部氏は、奥さんや実母と共に真剣に介護し続けた。私も糖尿病を患っており、目下、老老介護の身でもある。また今まで私の母の介護を一手に引き受けてくれた妻が、長年の介護疲れの結果、腰痛を発症し、一時歩行困難となった。これらの状況は、本書の久坂部氏とよく似ており、私は自らの身と照らし合わせながら、時には大声で笑い、時には慚愧に耐えない思いで、本書を読み進んだ。

なお、私は糖尿病、痴呆症、腰痛と向き合い、自らの死をみつめ、最近、現代医学に大きな疑問を持つようになってきている。本書で久坂部氏は、私のその疑問に、医者としての立場から、一定の回答を与えてくれている。それを読み私は、これは医学だけでなく、学問一般に言えることではないかと思った。現代社会に跋扈している学問は、豊かな人間社会を形成するために、真に有効なものなのだろうか。経験値を基にした俗人受けのする通説や常識は、人類が

経験したことの無い社会を前にして、有害物でしかないのではないか。結局、世界も日本も、ガラクタ知識に自縄自縛になっており、人類滅亡の道を突き進んでいるのが実状なのではないか。

思えば私は、ガラクタ知識の詰め込みに、その生涯の大半を費やし、その多寡を競い、それに拘泥してこれまで生きてきた。それが無意味であったことに、ようやく気がついたときは、死に際だった。私の学んできた経済学も、果たして人間社会を豊かにするために真に有効だったのだろうか。私は死ぬまでに、「人間を豊かにし幸せにする思想・哲学・経済学の構築」に近付きたいと思う。本書で久坂部氏も、「認知症介護の過酷さは、**どんなヒューマニズムも削り取るカンナのようなもので、たぶん釈迦でもキリストでも耐えられないだろう。**たいせつな家族が死んでほっとするというのは、認知症介護の厳しい現実で、それは紛れもない事実だ」と書いている。私も同感である。だからこそ今、新たな宗教、思想、哲学の誕生が強く望まれているのである。私はそれにチャレンジしたい。

以下に、本書の参考個所を列記しておく。

- ・ 現代人の多くは、安心を求めすぎて不安を増やし、長生きを求めて寿命を縮め、先のことを考えすぎて、無駄な心配で“今”を浪費している。
- ・ 若い医者は医療の可能性を信じ、最後までベストを尽くすべきだと思うかもしれないが（私も若いときはそうだった）、ある程度の年月、医者をやっていると、自ずと医療の限界も見えてくるし、ときには治療が有害であることも悟る。それを明らかにすることは、自己否定にもつながるので、医者はなかなか口を開かない。
- ・ 症状がないのに積極的に検査を受けて、病気の早期発見に努めるのは先手必勝を信じるやり方だ。病気は早くみつかるかもしれないが、異常もないのに精密検査を受けさせられて、よけいな不安を抱え込むストレスがある。それより病気が手遅れになったらあきらめるという覚悟を決めながら、検査など受けずに呑気に生きる、それが父の生き方だった。
- ・ 医者は治すことは熱心に研究するが、患者が自然に治ることにあまり目を向けない。自然治癒のメカニズムがわかってしまうと、医者の出番がなくなるからだろう。だが、患者にとっては大いにありがたいことだ。
- ・ 今の日本の医療は、とにかく安全を重視するので、先のことを考えすぎて、過剰になりやすい。念のためという発想で、患者のみならず健康な人までも、がんじがらめにしている。父が病気を放置し、検査を受けずにすまずのは、過剰な医療の現場を拒否していたからだ。多少の危険を覚悟すれば、

心はずっと安らかになることを知っていたのだろう。

- ・ 私も高齢者医療の現場にいて、長生きしすぎて苦しんでいる患者をたくさん見ている。世間では長生きをよいことのように言う人も多いが、実際の長生きは辛く過酷なものだ。足腰が弱って好きなところにも行けず、視力低下で本も読めず、聴力低下で音楽も聴けず、味覚低下でおいしいものもわからず、それどころか、むせて誤飲の危険が高まり、排泄機能が低下し、おしめをつけられ、風呂も毎日入れず、容貌も衰え、何の楽しみもなく、まわりの世話にばかりなる生活が“長生き”の実態だ。
- ・ 食事や水分も、必要とされる量を摂らなくても死なないことや、30日間の便秘でも大丈夫なことを、父は身をもって示してくれた。多くの医療者や患者は、“医学的な規準”に囚われすぎて、いたずらに不安を増やしているのではないか。もう少し緩やかな規準でも、穏やかに見守るほうがトータルとして生活の質は高まるだろう。
- ・ 介護者の気持ちは揺れる。感情的になって介護を投げだし、あとで反省して過剰な介護をしたり、施設に入れてしまってから、罪滅ぼしに頻繁に見舞いに行く家族もいる。むずかしい状況だが、介護とはもともとそういうものだし、危うい綱渡りを続けながら、とにかく日々を乗り切っていくしかない。
- ・ 認知症の夫が死んで喜ぶとはなんと薄情な、とは思わない。認知症介護の過酷さは、どんなヒューマニズムも削り取るカンナののようなもので、たぶん釈迦でもキリストでも耐えられないだろう。たいせつな家族が死んでほっとするというのは、認知症介護の厳しい現実で、それは紛れもない事実だ。
- ・ 日本人はわずかな危険を過大視して、絶対的な安心を求めすぎる。そのくせ、医療の進歩を盲信し、夢みたいな再生医療や遺伝子治療に期待をかける。イヤなほんとうのことを言う専門家が少ないせいだが、きれいな事ばかり広めるマスメディアにも振り回されないようにすべきだと思う。
- ・ 果たして、医療は死に対して有効だろうか。命を延ばしさえすればいいというのであれば、たしかに医療は有効だろう。しかし、延びる命の質は考えなくていいのか。つらく苦しい悲惨なだけの延命なら、ないほうが安らかだろう。長い人生の最後に、数日もしくは数週間の悲惨な時間を付け足して、どれほどの意味があろう。
- ・ 現代は医療が進歩したおかげで、さまざまな延命治療が可能になった、と思うのは大きな誤解で、いくら医療が進歩しても、人の死を食い止める

ことはできない。一部には有効な治療もあるが、率直に言って大半は無益。無理に死を食い止めようとするれば、身体は生きたまま腐るような状態になり、尊厳も安らかさもない悲惨な最期になる。

- ・ 最後に治療を求めて、平穏な死を妨げてしまうのは、たいてい家族だ。死に行く当人は、治療を求める元気もなく、ただ早く楽になりたいと思っている。
- ・ マスメディアは、孤独死を不幸のように取り沙汰するが、私は必ずしもそうは思わない。だれもいない部屋で、たった一人で死んでいくのは、さぞかし寂しいだろうと思うのは、当事者でない人の勝手な空想だ。もし、寂しさに耐えられないなら、元気なうちに家族やパートナーを持つだろう。
- ・ 孤独死のよい面は、よけいな医療を施されない分、死の苦しみが最低ラインで収まるということだ。その証拠に、孤独死で発見された人が、畳をかきむしるような苦痛の痕を残していることはまずない。餓死の場合でも、死の間際は飢えの苦しきも過ぎ去って、ほぼ苦痛を感じていないと思われる。孤独死のよい面は、生きている間、人の世話にならずにすむことだ。

4. 「死ぬってどういうことですか？」 瀬戸内寂聴・堀江貴文 角川フォレスト 2014年9月25日

副題：「今を生きるための9の討論」

本書は、92歳の瀬戸内寂聴氏と42歳の堀江貴文氏の対談集である。戦前・戦中・戦後を自由奔放に生き抜いた瀬戸内氏と平成の風雲児ホリエモンとの、年の差50の対談はそれなりにおもしろいが、「死ぬってどういうことですか？」という題名の割には、そのことについての言及は少ないし、箴言はない。

この二人に共通した主張が、「検察への警戒心」であることは興味深い。本対談集で、瀬戸内氏は大逆事件やラジオ商殺しの富士茂子裁判の執筆のための調査や取材を通じて知った検察の恐さを語り、堀江氏は自らの体験から、その理不尽さと恐さを語っている。話は鈴木宗男氏や小沢一郎氏、村木厚子氏、クレディ・スイスの脱税事件にも及び、その国家権力としての恐さを、堀江氏に「軍隊より、検察とかの方が怖い」と言わしめている。

以下に、二人の発言から、おもしろいと感じた個所を書き留めておく。

《瀬戸内寂聴氏の発言》

- ・ 死んだら向こうでは私の愛する人がいっぱい待っていてくれて歓迎パーティーをしてくれるのよ。そのとき誰が一番最初に声をかけようかな？
- ・ 死ぬ話の本なんか誰も買わないわよ。しんきくさい。

- ・ 何か成功するなら、一に才能、二に才能、三に才能、四に才能だと思いますよ。努力はその上、ちょっとする。才能がなかったら何もできない。それにちょっとした運ですよ。
- ・ 戦争が終わったときには、「殺される」と思ったわよ。うちの家族はそれまで中国人とすごく仲良くしてましたけどね。だけど一般の日本人がいかにも中国で威張って中国人をいじめてひどいことをしてきたか自分の目で見てるでしょ。私、だから「殺される」と思った。門を閉めてふるえていましたよ。赤ん坊を抱えていたでしょ。夫は北京で6月に召集されてどこの戦地にいるかわからない。だからもう歩いて満州へ行こうかと思ったの。それで、朝、そーっとドアを開けて外を見てみたんですよ。そうすると向かいの扉に真っ赤な紙、ビラがぱーっとたくさん貼ってあるんですよ。そこに上等の墨の字で黒々と「報仇以恩」って書いてあった。「仇に報いるに恩を以てす」。ああもうこれは負けるの当然だと思った。こんな立派な精神の国と喧嘩したら負けるなと思ったんですよ。で、北京では私は本当に何も中国人からひどいことをされなかった。いじめられたり、ひどい目にあったりはしなかった。その態度は立派でした。

《ホリエモンの発言》

- ・ 闇金とかでなければ別に追ってきませんよ。だから踏み倒せばいいんですよ。借金なんて。
- ・ いじめられることの一番の問題点っていうのは、「学校に行かないことが負け組だ」って、社会のその決めつけ。それがよくないんですよ。だから先生も「負けるな」って言うし、親も負け組だって思うし、周りの社会も負け組だって認めるし、そんな社会ですよ。学校なんてそうまでして別に行く必要ないですよ。
- ・ 瀬戸内さんは、つくづく生きる気満々の人で、たのもしい。

5. 「どうせ死ぬのに なぜ生きるのか」 名越康文著 PHP 新書 2014年11月28日

副題：「晴れやかな日々を送るための仏教心理学講義」

帯の言葉：「精神科医の結論 “答えは仏教の教えにある。”」

「どうせ死ぬのに なぜ生きるのか」という題名につられて、この本を読んできた。本書で著者の精神科医の名越氏は、まず「“どうせ死ぬのになぜ生きるのか”という問いに答えることなしには、僕らは自分の生きる意味をしっかりと根底からつかみとることはできません」と問題提起している。しかし「当た

り前の話ですが、精神医学にも、心理学にも、“必ず死ぬ運命にある人間の病を治すことにどのような意味があるのか”に答える理論はありません、「今の僕には、“どうせ死ぬのに なぜ生きるのか”という問いの“答え”はわかりません」と煩悶し続けたと書いている。そしてその結果として「仏教の行」に行き着いたという。

名越氏は、「おそらく“どうせ死ぬのに なぜ生きるのか”という人生をかけた難問の答えは言葉による“理屈”や“論理”の中ではなく、言葉を越えた“現実”の中にあります。ですから、この問いに対して本当に心の底から納得できるような“答え”を手にしたいと願うなら、僕らが身に付けなければいけないのは単なる言葉による知識や理屈ではなく、現実を“ありのまま”に捉え、その中で生きていくための“力”なのです。そしてそんな力を養うための唯一の道が“行”に取り組むことであるということ、仏教は教えてくれていると僕は感じた。だからこそ、僕は仏教を学ぼうと決めたのです」と書き、本書の大半を割き、自らが体得した「仏教の行」について、具体的に書き込んでいる。

以上

上海街角インタビュー ⑤9

社団法人大阪能率協会アジア・中国事業支援室副室長（海外委員）

順利包装集団董事（在上海）

福喜多技術士事務所所長

福喜多俊夫

お皿の底を見せますか？

商務部と国家発展改革委員会は11月1日より「飲食業経営管理弁法」を施行した。飲食業者が最低消費額を設定することを禁じているほか、消費者に対して倹約を促すよう要求。違反した場合、最高3万元の罰金が科せられる。これも、習近平政権の倹約令の一環であろう。

中国では客を接待する際には、いくら食べても皿の底が見えないように皿数を多くし、量もたっぷり注文するのが招待主のメンツであった。会社の年夜飯（忘年会）でも、幹部は従業員から不満が出ないように酒は切らさず、料理は不足が出ないように大量に注文したものだ。倹約令が発せられてから2年、上海の宴会風景はどうなっているのだろうか？

1. 50歳代前半の女性（中小企業経営者）

お客さんや親族との食事会では、基本的に以前と大きな違いはありません。お皿の底が見えるかどうかは別にして、必ず少し残るくらいの皿数と量を注文します。私が招待する場合は料理の注文はいつも私が自分でします。以前と違うのは親族での食事会では、残ったものは打包（ダーバオ、持ち帰り）するようになりました。

2. 50歳代前半の男性

まだ、お皿の底を見せないという風習は残っています。しかし、どちらかというと、この風習は公費食事の時に多く出ます。公務員の接待、あるいは会社接待で、個人のお金でないので惜しまないのでしょう。家族の食事、親戚接待の食事は無駄に注文しません。家族や親戚の食事の時は残ったものは持ち帰ります。中国で料理の注文を多めにする習慣は、中華料理のオーダーは最初に全部済ませ、途中で追加するということが普通やらないので、足りなくならないように大目に注文する習慣がつい

たのだと思います。私は農家の出身なので、食べ物は無駄にしません。会社接待の場合にもメンバーや人数を考えながら慎重に注文します。料理の注文は結構難しいです。多い目に注文するほうが楽だから、普通の人はどうしても多い目に注文することになります。

最近、上海ではお皿の底を見せないほどたくさん注文することはなくなりましたね。注文しすぎると逆に成金だと軽蔑されるケースも多くなりました。

3. 30歳代前半の女性

私は小さいときから「食べ物は無駄にしてはいけない」と言われて育ったので、レストランでの注文も食べきれぬ量を注文するように心がけています。しかし、会社生活では私のような考えの人は少数派です。会社の接待でお皿が空になるのは“没面子”だと考えている人が多いです。私の勤めている会社でも、社内の会食やお客さんの接待の時、かなりの量が残るように注文しています。

しかし、最近、若い人達の会食では、面子を気にする人はいません。全皿が空っぽになり、全員が満腹満足というのが主催者の注文の腕です。

4. 40歳代中頃の女性

我社では社内の会食では以前と違って無駄な注文は控えるようになりました。しかし、お客さんを接待するときは以前のままです。十分満足してもらえるように盛りだくさん注文します。家族・親族の食事ではほどほどの量を注文し、残ったものは持ち帰ります。

5. 40歳代後半の男性

公私で使い分けています。会社では社内会食でも接待でも多い目に注文します。

自分で払う家族・親族の食事会では食べきれぬ量を注文します。残れば必ず持ち帰ります。お店から持ち帰ったらどうですか、と言われたことはないですね。要求しないと持ち帰り用の容器はくれません。

6. 40歳代前半の男性

大事なお客さんを接待するときに多めに注文するのは中国の礼儀です。私は上海で注文する時は4分の1くらい残すように注文します。こ

の計算で地方に出張したとき注文すると、一皿の盛付量が多いので半分くらい残ってしまいます。家族で食事に行くとき無駄はしません。家族の間でメンツなど必要ないですから食べきれぬ量を注文します。

接客ではケチったらいけません。丁度いい量というのは誰にもわかりません。だから、お皿の底を見せてケチだと思われないように多めに注文するのは礼儀にかなっているのです。

7. 20歳代後半の女性

私は会社で接待をするような立場にはないので、接待についてはよくわかりません。

社内の懇親会などでは、予算内に収まるように適量を注文します。

家族や親戚との食事あまり残さないように注文します。残ったら必ず持って帰ります。

8. 40歳代中頃の女性

私は専業主婦なので会社の接待のことはよくわかりませんが、家族や親族と食事をするときは、おいしい料理がわかっている、行きつけの店では、おいしい料理をわざと多く注文してもって帰れるようにしています。スープなど残っても持って帰れないものもありますが、ある程度の量を注文しないとおいしくないので気にしません。

官公庁や国有企業のように、これまで桁外れに贅沢していたところは儉約令で自粛しているが、一般企業の宴会はこれまでの習慣をそう簡単には変えられないようだ。だから「飲食業経営管理弁法」のような通達が必要なのだろう。また、「公のものは自分のもの」という庶民感覚も残っていて、自分で払うときは儉約し、会社のお金で支払うものは気にしないという気風も健在だ。

以上

【中国経済最新統計】

	① 実質 GDP 増加率 (%)	② 工業付 加価値 増加率 (%)	③ 消費財 小売総 額増加 率(%)	④ 消費者 物価指 数上昇 率(%)	⑤ 都市固 定資産 投資増 加率 (%)	⑥ 貿易収 支 (億 ^米)	⑦ 輸 出 増加率 (%)	⑧ 輸 入 増加率 (%)	⑨ 外国直 接投資 件数の 増加率 (%)	⑩ 外国直 接投資 金額増 加率 (%)	⑪ 貨幣供 給量増 加率 M2(%)	⑫ 人民元 貸出残 高増加 率(%)
2005年	10.4		12.9	1.8	27.2	1020	28.4	17.6	0.8	▲0.5	17.6	9.3
2006年	11.6		13.7	1.5	24.3	1775	27.2	19.9	▲5.7	4.5	15.7	15.7
2007年	13.0	18.5	16.8	4.8	25.8	2618	25.7	20.8	▲8.7	18.7	16.7	16.1
2008年	9.0	12.9	21.6	5.9	26.1	2955	17.2	18.5	▲27.4	23.6	17.8	15.9
2009年	9.1	11.0	15.5	▲0.7	31.0	1961	▲15.9	▲11.3	▲14.9	▲16.9	27.6	31.7
2010年	10.3	15.7	18.4	3.3	24.5	1831	31.3	38.7	16.9	17.4	19.7	19.8
2011年	9.2	13.9	17.1	5.4	24.0	1549	20.3	24.9	1.1	9.7	13.6	14.3
2012年	7.7	10.0	14.3	2.7	20.7	2303	7.9	4.3	▲10.1	▲3.7	13.8	15.0
2月		21.3		3.2	—	-315	18.3	40.3	38.7	-0.9	17.8	15.0
3月	8.1	11.9	15.2	3.6	21.1	53	8.8	5.4	-6.5	-6.1	18.1	15.7
4月		9.3	14.1	3.4	19.2	184	4.9	0.4	-26.1	-0.7	17.5	15.4
5月		9.6	13.8	3.0	21.0	187	15.3	12.7	-6.1	0.0	17.9	15.7
6月	7.6	9.5	13.7	2.2	21.8	317	11.3	6.3	-16.3	-6.9	18.5	16.0
7月		9.2	13.1	1.8	20.6	251	1.0	5.7	-7.8	-8.6	18.9	16.0
8月		8.9	13.2	2.0	19.4	267	2.7	-2.7	-12.7	-1.4	18.4	16.1
9月	7.4	9.2	14.2	1.9	23.1	277	9.8	2.3	-6.4	-6.8	19.8	16.2
10月		9.6	14.5	1.7	22.4	320	11.5	2.2	1.8	-0.2	14.6	15.9
11月		10.1	14.9	2.0	20.0	196	2.8	-0.1	-8.7	-5.4	14.5	15.7
12月	7.9	10.3	15.2	2.5	18.8	316	14.0	6.0	-7.8	-4.5	14.4	15.0
2013年	7.7	9.7	11.4	2.6								14.1
1月				2.0	20.8	291	25.0	29.0	-12.4	-3.4	15.9	15.4
2月				3.2		153	21.7	-14.9	-35.6	6.3	15.2	15.1
3月	7.7	8.9	12.6	2.1	21.5	-9	10.0	14.2	-19.7	5.7	15.7	14.9
4月		9.3	12.8	2.4	19.8	182	14.6	16.6	13.9	0.4	16.1	14.9
5月		9.2	12.9	2.1	19.7	204	0.9	-0.1	-14.4	0.3	15.8	14.5
6月	7.5	8.9	13.3	2.7	19.9	271	-3.3	-0.9	-17.3	20.1	14.0	14.1
7月		9.7	13.2	2.7	20.2	178	5.1	10.8	1.2	24.1	14.5	14.3
8月		10.4	13.4	2.6	21.4	285	7.1	7.1	-11.7	0.6	14.7	14.1
9月	7.8	10.2	13.3	3.1	19.6	152	-0.4	7.4	-16.8	4.9	14.2	14.3
10月		10.3	13.3	3.2	19.2	311	5.6	7.5	-8.2	1.2	14.3	14.1
11月		10.0	13.7	3.0	17.6	338	12.7	5.4	-9.3	2.3	14.2	14.2
12月	7.7	9.7	13.6	2.5	17.2	256	4.3	8.6	-3.4	-42.6	13.6	14.1
2014年												
1月				2.5	19.8	319	10.5	10.8	-8.6	-4.5	13.2	14.3
2月				2.0		-230	-18.1	10.4	1.3	4.0	13.3	14.2
3月	7.4	8.8	12.2	2.4	17.3	77	-6.6	-11.3	6.1	-1.5	12.1	13.9
4月		8.7	11.9	1.8	16.6	185	0.8	0.7	0.5	3.4	13.2	13.7
5月		8.8	12.5	2.5	16.9	359	7.0	-1.7	8.4	-6.6	13.4	13.9
6月	7.5	9.2	12.4	2.3	17.9	316	7.2	5.5	10.3	0.2	14.7	14.0
7月		9.0	12.2	2.3	15.6	473	14.5	-1.5	14.0	-17.0	13.5	13.4
8月		6.9	11.9	2.0	13.3	498	9.4	-2.1	5.2	-14.0	12.8	13.3
9月		8.0	11.6	1.6	11.5	310	15.1	7.2	9.4	1.9	11.6	13.2
10月		7.7	11.5	1.6	13.9	454	11.6	4.6	8.7	1.3	12.1	13.2

- 注：1. ①「実質 GDP 増加率」は前年同期（四半期）比、その他の増加率はいずれも前年同月比である。
2. 中国では、旧正月休みは年によって月が変わるため、1月と2月の前年同月比は比較できない場合があるので注意されたい。また、()内の数字は1月から当該月までの合計の前年同期に対する増加率を示している。
3. ③「消費財小売総額」は中国における「社会消費財小売総額」、④「消費者物価指数」は「住民消費価格指数」に対応している。⑤「都市固定資産投資」は全国総投資額の86%（2007年）を占めている。⑥—⑧はいずれもモノの貿易である。⑨と⑩は実施ベースである。

出所：①—⑤は国家统计局統計、⑥⑦⑧は海関統計、⑨⑩は商務部統計、⑪⑫は中国人民銀行統計による。